

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第8条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	鈴木 耕太郎 (すずき こうたろう)
○学位の種類	博士 (文学)
○授与番号	甲 第 1178 号
○授与年月日	2017 年 3 月 31 日
○学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項 学位規則第 4 条第 1 項
○学位論文の題名	「中世神話」としての牛頭天王 —牛頭天王信仰に関するテキストの研究—
○審査委員	(主査) 中本 大 (立命館大学文学部教授) 中西 健治 (立命館大学文学部特別任用教授) 川崎 佐知子 (立命館大学文学部准教授)

<論文の内容の要旨>

本論文の目的は、牛頭天王信仰に関する縁起や注釈書などの文献を精緻に読解し、その信仰の世界を解明することである。

第一章「牛頭天王信仰の研究史と本論の課題」では、牛頭天王信仰に関する研究史の成果と課題を明らかにし、「中世神話」という視座の有用性を指摘する。その上で、牛頭天王信仰が、本邦中世における信仰の特異性を解明する重要な主題であることを述べている。

筆者の言う「中世神話」の定義と研究に援用する有用性が述べられるのが、第二・第三節である。ここでは、牛頭天王の習合関係、信仰に関する言説の多様性、本地物語と牛頭天王信仰との関係性、『篋篋内伝』に見える儀礼的側面などを考察した先行研究を振り返り、牛頭天王信仰を考察する上で、これまで論理の破綻、矛盾として捉えられてきた信仰に関するさまざまな言説を、精確に読解し直す必要性を提起していく。それを踏まえ、第四節では、近代以降の価値観に依拠せず、広く中世特有の神話理解を求めるための方法として提唱された「中世神話」を援用することの意義について再検討する。「中世神話」とは、神仏習合思想を基盤とする『日本書記』神代巻の中世的解釈の総体であり、中世特有の信仰であるとともに、中世特有の学問的知識の集積だとするのが、鈴木氏の定義である。第五節では、山本ひろ子・斎藤英喜らの研究を踏まえつつ、牛頭天王信仰こそが「中世神話」研究の最適なテーマであり、中世における特異な信仰の象徴的存在であることを論じている。

第二章「祇園社祭神の変貌」では、京都祇園社の祭神に注目し、人々が祇園社祭神をど

のように認識し、また言説化してきたのかを明らかにしていく。第一節では、室町中期成立といわれる『二十二社註式』に、祇園社祭神である牛頭天王はスサノヲの「垂迹」だとする言説が見られること、ここから牛頭天王と日本神話の神であるスサノヲとが、祇園社祭神として同体視されていたことを確認する。その習合の始原を探るため、第二節では、祇園社と牛頭天王との関連性について考察する。祇園社関連史料の中で牛頭天王の名が確認できるのは、十世紀成立の『本朝世紀』が最古であること、鎌倉初期成立の十卷本『伊呂波字類抄』では牛頭天王の異名として「武塔天神」という名が挙げられることなどを踏まえ、これらは『古事記』・『日本書紀』に記されない異国神と見做すべきことを述べる。さらに当時、異国を疫病の発生源とする認識があったこと、異国神は行疫神であり、転じて除疫・防疫神と認識されるようになったこと論じる。

第三節では『古事記』・『日本書紀』や「六月晦大祓(みなづきのつごもりのおほはらひ)」・「道饗祭(みちのあへのまつり)」祝詞におけるスサノヲ像を検証する。スサノヲが支配する「根国・底(之)国」は、疫病の発生源と見なされていたものの、記紀や祝詞には行疫神としてのスサノヲは見られないことを示した上で、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて、スサノヲが除疫・防疫の神として認識されていく過程を考察している。続く第四・五節では、スサノヲが行疫神であると見なされるようになった契機は、卜部兼方編纂『釈日本紀』であったことを論じている。本書は兼方の父・兼文が一条実経、その息子の家経に対して行った『日本書紀』の講義を端緒として成立しており、兼文の『日本書紀』注釈こそが祇園社祭神を変貌させる契機であったことを述べる。他方、兼文は祇園社祭神としての牛頭天王については言及していないこと、祇園社祭神と牛頭天王、スサノヲとを結び付けたのは、先行研究で指摘される吉田兼俱ではなく、実際には一条兼良であったことを論じるのが第六・七節である。兼良による『日本書紀』注釈もまた、新たな祇園社祭神を変貌させる「中世日本紀」と見なすことができること、それは時代の画期となる視座であったことが論じられている。

兼良の祇園社祭神言説をさらに補訂したのが、吉田神道を打ち立てた吉田兼俱である。第八節では、兼俱がおこなった『日本書紀』神代巻の講義を録した『神書聞塵』から、兼俱が祇園社祭神言説をどのように展開したかを論じている。兼俱は兼良の『日本書記纂疏』を享受しつつも、牛頭天王を含むすべての異国神はスサノヲと同体であると結論付けること、こうした解釈もまた、吉田神道の確立という新たな規範・価値観の創造を契機とするものであったことを論じている。

続く第三章「感応する牛頭天王」では、異国神、行疫ならびに除疫・防疫神とは異なる牛頭天王信仰の世界を、蘇民将来譚を組み込まない牛頭天王信仰のテキストから検討している。取り上げるのは台密事相書『阿婆縛抄(あさばしょう)』所収「感応寺縁起」である。

第一節で「感応寺縁起」を「中世神話」として読解することの意義を述べた上で、第二節では「感応寺縁起」における牛頭天王が「清原真人惟任」と名乗る老翁神として登場す

ること、その老翁神は、感応寺の伽藍地である川前（河崎）の地主神であること、また行疫神かつ除疫・防疫神としては描かれていないことを検証する。

続く第三節において、この「感応寺縁起」に見られる老翁神（牛頭天王）の利益が、感応寺本尊である観音の利益と重なることを示し、老翁神が万能神的神格を備えていること、その信仰の背景には、平安中期成立『成菩提集』で説かれる牛頭天王と観音との同体信仰があることを明らかにする。

第四節では、本縁起には牛頭天王から真言僧壺演へ授けられた儀礼が描かれること、それは感応寺境内にある天神堂に祀られた牛頭天王、すなわち感応寺伽藍神である「川前天神」を言祝ぐものであることを明らかにする。続く第五節では、老翁神と壺演との関係について考察する。元来川前の地主神であった老翁神が、壺演と対話していく過程で強大な神へと変貌、あるいは成長を遂げていくこと、最終的には正邪を統べる存在となり壺演の前から姿を消していること、そのような神と交渉を続けた壺演もまた、「感応」関係を通して成長を遂げていたことを述べる。その上で、牛頭天王を祀り、また儀礼を行う場として川前天神堂建立を描いたと考えられることを論じている。

第六節では『元亨釈書』所収「感応寺縁起」を取り上げ、『阿婆縛抄』所収縁起との違いを丁寧に論じている。『元亨釈書』所収縁起における牛頭天王像は、老翁姿の地主神という点以外は異なっていること、変容の背景には、清原氏と感応寺との関係性消滅が推定されること、さらに『壺囊鈔(あいのうしょう)』所収「感応寺縁起」では「河崎の鎮守は是祇園」と時代が降るにつれ、感応寺（川前天神堂）の牛頭天王も祇園社祭神に収斂されていくことが検証される。

本論文最終章である第四章『牛頭天王御縁起』（「文明本」）の信仰世界では、蘇民将来譚を取り込むものの、行疫神かつ除疫・防疫神とは関連しない牛頭天王信仰のあり方を考察する。第一節では文明本がいわゆる「祇園牛頭天王縁起」最古の書写本であること、牛頭天王信仰の中に年神信仰が取り込まれていること、『篋篋内伝(ほきないでん)』と共通する部分が重要であることを検証する。続く第二節では、牛頭天王に滅ぼされる古端将来が、その直前に大般若経会を修していること、しかし、それは牛頭天王により打ち破られること、このプロットは『篋篋内伝』における太山府君王の法を打ち破る牛頭天王とも共通し、大般若経会（または泰山府君祭）は既存の儀礼を象徴するものであったこと、それらが牛頭天王により打ち破られるのは、牛頭天王を祀る効力が既存の儀礼以上であることを示すことなどを明らかにする。

第三節では、縁起後半部に記される正月儀礼に注目し、既存の儀礼をテキストの信仰世界に合わせて創り替えるという「文明本」独自の表現方法を明らかにする。続く第四節では、牛頭天王による利益を受けるためには、古端を「呪咀」することが不可欠とされる背景を考察し、呪咀には段階があり、その段階を経ることで利益は増大する一方、利益の対象者は狭められていることが明らかにされる。さらに、これまで「文明本」を始めとする「祇園縁起」は『篋篋内伝』における五節祭礼が不完全な状態で記される、と考えられて

きたことに反論し、牛頭天王祭祀の区切りとなる六月十五日以降の祭礼を敢えて縁起の中に記載しなかった可能性も考察する。

第五節では、縁起における八王子に関する記述の意義について考察する。この縁起において、行疫神でかつ蘇民を守護する除疫・防疫神は牛頭天王ではなく八王子であること、牛頭天王は現世利益を約束する万能神的存在として造形されていることを論じる。すなわち信仰はテキストによって変貌する一方、テキストもまた変容し続けるという、信仰における創造と変容の連環を明らかにすることに繋がるのである。

如上、本論文は牛頭天王信仰を文学研究の手法から研究し、多様なテキストが描き出す信仰の多彩な様相を明らかにするのである。

<論文審査の結果の要旨>

本論文は停滞していた牛頭天王研究を一気に進展させた貴重な成果であると評価できる。以下、具体的な審査結果を述べる。

第一章は一見すると単なる先行研究のまとめと見なされるものの、そうした安易なレベルの批評ではなく、近年の本邦中世文学研究の主要な潮流とも言える「注釈」や「唱導」を主眼とする仏教文学研究の動向を的確に踏まえた上で、今後、牛頭天王研究において進むべき方向性を示した画期的な問題提起であることが得心できるのである。筆者が称揚する「中世神話」とは、伊勢神宮や熱田神宮をめぐる言説の研究史を中心に定義されてきた概念であり、しばしば日本の王法をめぐる問題に繋がられてきた。それを援用することにより牛頭天王信仰の特異性が浮かび上がるという仮説は、まさに逆転の発想であり、魅力的な主張であった。これまでの研究者が、祇園社自らが祇園社祭神を語らない、という事実を等閑視してきたことへの反省を促す構成になっているのも心憎い。その意味では本論文の緒論としての役割を果たしており、本論文の成功を確信させる記述になっていると考えられる。また、本論文における牛頭天王信仰とは、特に京都における祭祀を中心に引き上げており、播磨広峯社や尾張津島社とは一線を画する首都・京都の信仰を対象とするともここで明記されている。

第二章では「祇園社祭神」という枠組みにとどまらない牛頭天王像を考察するため、敢えて祇園社祭神の歴史的検証を、というやはり逆転の発想から構想されたものである。ここで取り上げられる資料は既に学界でよく知られているものばかりであり、卜部兼方・一条兼良・吉田兼俱は言うまでもなく中世文学研究における主要な人物である。しかしその著作を精緻に解読することによって、その影響関係や学問的受容、交流を浮かび上がらせたのは特筆すべき成果であった。特に兼良『日本書記纂疏』の意義に関する考証は説得力があり、『神道集』成立の謎に迫り得る可能性を提起したことには蒙を啓かれた。

第三章は雑誌論文として発表されたときから学界で注目された論考に、新たな視点を付加して深化させたものである。京都には行疫神・除疫神を祀る神社は数多くあるものの、天台集の重要な事相書である『阿婆縛抄』に採録される縁起は数少ない。その一つである

「感応寺縁起」に注目したことが、そもそも卓見である。考察は精緻で、結論も妥当であるものの、文中記される「陽成天皇御宇」「元慶元年」「右大臣」「藤原朝臣長良」などの祇園感神院創建に関わるキーワードへの踏み込んだ考察や、清原氏と防疫・除疫との関わりなどについては詳細な説明を求めたいものの、現存資料からの補足が難しいこともよく理解できるのである。その上で、時代とともに大きく変容する牛頭天王信仰の具体例を示し得たことは、本論文の価値を高める最大の要因になったと評価できる。

第四章は「スサノヲ」から切り離される牛頭天王の多彩なイメージの源泉としての『篋篋内伝』に描かれる多様な儀礼に関する考察である。文明本縁起と『篋篋内伝』の比較は困難な作業であり、特に縁起本文の省略や不正確な引用と理解されてきた儀礼に関する記述について、文明本の独自基準に基づく取捨選択の結果である可能性を導いたのは重要である。成立の位相が異なると考えられてきたテキスト間の影響関係や、テキスト独自の解釈を解き明かしていくことが、牛頭天王信仰の創造と変容の過程を明らかにする最も有効な方法であることを得心できる結論であった。

本論文に関する公開審査では、学位申請者による論文内容の説明につづいて、審査委員による申請者に対する口頭試問が行われた。口頭試問では、論文中の表現や語彙など、更に厳密な定義や適切な使用を求めたい部分なども指摘されたものの、本学大学院進学以来、申請者が孜孜として取り組んできた牛頭天王信仰に関する、すぐれた作品研究であることは疑いようがなく、審査委員会は一一致して、本論文は博士学位を授与するに相応しいものと判断した。

<試験または学力確認の結果の要旨>

本論文の公開審査は2017年6月16日（金曜日）15時30分から17時40分まで、末川記念会館第2会議室で行われた。

本論文の主査及び副査は、本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程の在学期間中における様々な研究成果を評価するとともに、日常的に研究課題に関する討論や指導を実施してきた。また審査委員の主査および副査は、本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程の在学期間中の様々な研究活動、論文作成に至る研究指導、さらに公開審査の質疑応答を通して博士学位に相応しい能力を有することを確認した。

したがって申請者に対して、本学学位規程第18条第1項に基づいて、「博士（文学 立命館大学）」の学位を授与することが適当であると判断する。